

生物シリーズ

夢前川いきもの観察記

アカギツネ

Red fox of Yumesaki river

姫路科学館 学芸・普及担当 徳重哲哉

夢前川沿いで2020年から続けているキジの観察の時に、キツネを見かけることがあります。最初(2020年6月21日)に姿を見た時にはガチョウをくわえた「こぎつね座」の星座絵(図1)を思い出し、不安な気持ちになりました。2021年6月15日と6月22日にはキジとキツネの遭遇を目撃しました。キジは警戒した様子でしたが、キツネは一瞥^{いちべつ}しただけでした(写真1)。

2001年夏に山崎浄水場前の県道でロードキル個体を拾得したことがあります。夢前川沿いにキツネがいることは知っていました。拾った個体は目立つ外傷がなかったので、剥製と全身骨格標本を作ってもらい、剥製は2階常設展示のジオラマに、骨格標本はゾウの姫子やタヌキの全身骨格標本と共に展示しています(写真2)。

■アカギツネ¹

姫路で見られるキツネはアカギツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)です。北半球(アフリカ北部、ヨーロッパ、北アメリカ、アジア)に広く分布します。姫路市内では浜手の工業地帯を除く全域に分布しますが²、基本的に夜行性のため、意識していないと出会う機会は少ないでしょう。同じイヌ科のイヌ属やタヌキ属と比べると体は細く、四肢や尾が長く、耳介は先端がとがります。体重は4~7kg、頭胴長578~780mm、尾長300~440mmです。頭骨は吻^{くちばし}が細長く、横から見た輪郭は鼻骨から頭頂骨前部までが直線に近く、前頭部の盛り上がりが少ないのが特徴です。イヌ科ですが、眼にはネコのような縦長の瞳孔を持ちます。

アカギツネは林に隣接した開けた場所に生息します。夕方から明け方にかけての暗い時間帯に活動し、昼間は寝ています(写真3)。食性は肉食に寄った雑食性で、ネズミ類などの小型哺乳類、鳥類、昆虫類、

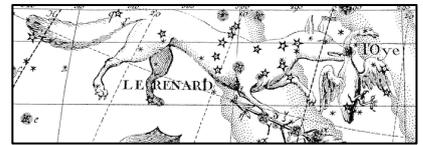


図1 こぎつね座
「フラムステード天球図譜」仏語版、1776年(姫路科学館蔵)より



写真1 アカギツネ
2021/06/22 撮影



写真2 アカギツネの全身骨格標本



写真3 アカギツネの昼寝
2022/05/10 8:30 撮影

¹ 参考: 阿部 永、「増補版日本産哺乳類頭骨図説」p.243、北海道大学出版会(2007年)

² 令和3年度(2021年度)中大型哺乳類分布調査報告書p.48、環境省自然環境局生物多様性センター(2022年)

果実類のほか、人の生活圏ではトウモロコシ、^{かきん}家禽や家畜の死肉、残飯類も食べます。余った餌は地中に埋めて貯食します。

アカギツネは1～2月に交尾し、52日前後の妊娠期間を経て平均で3～6匹の子を産みます。出産と授乳期の子育てはトンネル状の巣穴の中で行い、4週間程度で子ギツネが巣穴の外に出るようになります。巣穴での子育ては母親が中心ですが、父親も餌を獲ってきたり、巣穴から出るようになると、子どもに狩りを教えるなどで協力します。子ギツネは夏の終わりには親元から強制的に追い出され、単独で狩りをして暮らすようになります。これは、近親交配を避けるだけでなく、キツネの餌は小さく、一口で飲み込めるものがほとんどなので、群れで餌を分け合えないことも関係します³。

キツネの寿命は飼育下では10年程度ですが、単独で暮らす野生個体は短命で、6～7年生き延びることができるのは1%程度とされています⁴。

■夢前川のキツネ観察記録、2022年以降

2022年にキツネを観察したのは、姫路バイパスから才崎橋にかけてです(図2)。4月12日から8月14日までに朝夕のべ82回キジチェックを行い、36回キツネを観察しました。キツネ遭遇率は43.9%です。

2022年1月11日、冬枯れの中洲に穴を見つけました。いつもキジがいる場所なのに気づかずにはいました。何かの巣穴かな?と思い時々チェックしていたところ、4月12日に通りかかった時に顔が見えました(写真4)。すぐに親が現れたのでキツネだとわかりました。この出入口は、出産に向けて新しく掘ったのかもしれませんが。

4月24日に子ギツネ2匹でじゃれ合う姿が見られ、5月5日には母親と3匹の子を確認しました。出産したのが3匹なのか、育ったのが3匹だけなのかはわかりません。5月になると河川敷の草が茂り観察しにくくなりましたが、時折川辺に姿を現した時には、次第に大人の体つきに近づく様子が観察できました(写真5)。

5月22日朝に、中洲で寝ていたオスが立ち去る姿を見ました。メスや子ギツネと比べると色が濃く、尾が細く、毛並みが悪かったので、母親と見分けがつかしました。このオスが子ギツネと共に行動することもありました。父親が狩りを教えていたのでしょうか。

6月中旬を過ぎると、早朝や日没後に子ギツネだけで広い河原を駆け回る姿が見られました(写真6)。7月に入ると親子が揃った姿を見ることはなくなり、きょうだい2匹組と母親と子1匹の組み合わせを別々に見かけました。8月14日に川の浅瀬を横切って中洲の草むらに消える若い個体の後姿を見たのが、この年最後のキツネでした。

2023年は、朝夕のべ68回のキジチェック中、キツネを見たのは4回(遭遇率5.9%)で、子ギツネは見えていません。2024年は3月7日に寝ているキツネを1回見えています。どうなるのでしょうか。

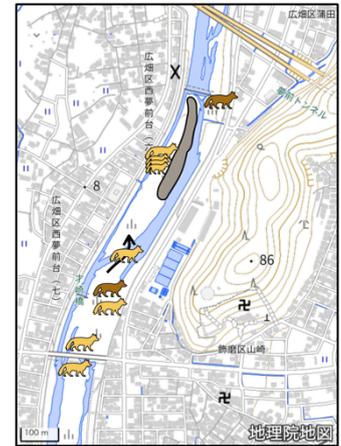


図2 キツネ観察ゾーン
中央上の灰色の部分
が2022年にキツネの親子
を見かけた領域。キツネア
イコンは単独で見た場所
で、濃い色はオス。矢印
のルートで川を渡る姿
を2回目撃。左下バーは
100m。



写真4 巣穴と子ギツネ
2022/04/12 16:27 撮影



写真5 子ギツネのきょうだい
川辺に水を飲みにやってきた。
2022/05/24 5:05 撮影

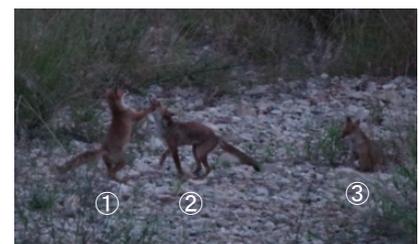


写真6 仲良し3きょうだい
2022/6/28 4:30 撮影

³ 塚田英晴、「野生動物学者が教えるキツネのせかい」p.80～81、緑書房(2024年)

⁴ 同上、P.98